

の笑顔が自分の喜びに

——ボランティアで活躍する人々——

人に喜んでもらえることが何よりもうれしい—ボランティアとして活躍している人たちに共通する想いも、最初のきっかけは人それぞれ。

「お金と時間にゆとりがないからボランティアは無理」という人も多いかもしれません。でも、ほんのちょっとしたことで人も自分も幸せになれる。今号では、厚別区内でボランティアとして活躍する人、そしてそれをつないで大きな輪にしようとする団体を紹介します。

人のためにお役に立ちたい

現役時代は、商社マンとして世界中を飛び回って活躍した佐藤喜英さん(74歳)。子どものころから歌が大好きだった佐藤さんは、小樽商科大学在学中に本格的に歌の基本を勉強したといいます。

退職後は学生時代に勉強した声楽を生かし、一城貴志のステージネームで、さまざまなジャンルの曲を歌うプロ歌手として歌い続けています。多忙なステージの合間に福祉施設などにも慰問して、高齢者や障がい者の皆さんと接していくうち、自分の住む地域で何かお役に立てないかと、2年前から

始めたのが福祉除雪のボランティア協力員です。

「自分の健康づくりにもなるし、人に喜んでいただけるのが何よりうれしいです」という佐藤さん。昨冬は9軒の高齢者宅を担当するなど、大忙しの毎日でしたが、気持ちがとても充実したといいます。冬場に備えてトレーニングもしている佐藤さんは、除雪ボランティアをきっかけに利用者から夏場の草むしりも頼まれ、汗を流しています。



さとう よしひで
佐藤 喜英さん

いつの間にか積極的に

「そっちに倒すよ。」「はい。」8月のある日、一人暮らしの高齢者宅でダンスの模様替えボランティアをしていたのは北星学園大学社会福祉学部4年の吉松祐貴さん(22歳)。

デイサービスに勤めていたお母さんを見て、福祉の勉強をしたいと思った吉松さんは、大学入学後、友人の誘いでボランティアサークルに入りました。

初めは戸惑いもありましたが、子どもたちと一緒に料理を作るボランティアを体験して、ボランティア活動の楽しさを感じます。3年前に東日本大震災の被災地支援に携わった頃には、受け身だった自分が積極的になっていたことに気づい

たといいます。それ以降、「自分が今できることをしたい」という想いから、熊本地震や南富良野の大雨災害の活動などにも携わります。現地にはなかなか行くことができない学生たちに、自分の経験や現状を伝える活動も始めました。

大学のある厚別区で、地域の昼食会での寸劇ボランティアや清掃ボランティアなどに参加し、地域の方々ともつながりをつくっている吉松さん。「大学だけでは決して関わることでできない方々と出会い、新しいつながりをつくっていくことがほんとうに楽しいです」と話してくれました。



よしまつ ゆうき
吉松 祐貴さん



障がいがあるとか、目が見えなくなるとか、そうしたことでも「今が一番」と思っている方もいるように、



介護付有料老人ホーム(特定施設)・サービス付高齢者向け住宅
〒004-0003 札幌市厚別区厚別東3条6丁目5-35 ☎011-897-6610